五位

遊楽芸風　妙・感・意・見・声五位云

一、妙風

　妙者、離有無、亙有無。無体顕見風。然者、非所可及褒美。

妙といつぱ、有無を離れて有無に亙る。無の体見風に顕はる。然れば、褒美の及ぶべき所にあらず。

　天台妙釈云、「言語道断、不思議、心行所滅之処、謂之妙」。

　天台妙釈に云はく、「言語道断、不思議、心行所滅之処、これを妙と謂ふ」。

二、感風

感者、所不慮驚心目。感風有即座・即心・即目。所転気、更成離見之見感。

感といつぱ、慮らざる所にして心・目を驚かす。感風は即座・即心・即目にあり。気を転ずる所、更に離見の見感と成る。

毛詩曰、「正得失、動天地、感鬼神。謂之感」。

毛詩に曰く、「得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむ。これを感と謂ふ」。

三、意風

意者、所成内意風、顕外、至妙成感。顕浅深、成諸体之風根。是、見面白花種也。

意といつぱ、内に成す所の意風、外に顕はれ、至妙の感を成す。浅深を顕はし、諸体の風根と成る。これ、面白き花を見はす種也。

　玉屑評詩曰、「意中有景、景中有意」云。

　玉屑の評詩に曰く、「意中に景有り、景中に意有り」と云ふ。

四、見風

　見者、既顕舞風、手舞・足踏、目前顕芸能証見。

　見といつぱ、既に舞風に顕はれ、手舞・足踏、目前に芸能の証見を顕はす。

　孟子云、「視水有道、必視其瀾」云。

　孟子に云はく、「水を視るに道有り、必ずその瀾を視る」と云ふ。

五、声風

　声者、縦見風少疎、音感通心耳、曲聞之瑞風、成数人感。

声といつぱ、縱ひ見風少し疎かなりとも、音感心耳に通じ、曲聞の瑞風、数人の感を成す。

　毛詩云、「情発於声、声成文、謂之音」。

　毛詩に云はく、「情声に発し、声文を成す。これを音と謂ふ」。

□□…□□遊楽之名実□□……□□通将聖之性心囗囗……□□欽明可神秘者乎

孔門□常完